

「ユニセフ子ども物語」

地球に生きる子どもの暮らし

Democratic Socialist Republic of Sri Lanka

スリランカ 民主社会主義共和国



シバムとシルバ

～スリランカでの平和のための教育～



シバムは男の子、シルバは女の子です。ふたりとも9さいで、スリランカのコロomboという町に住んでいます。スリランカにはいくつかの民族がくらししており、シバムはタミル人、シルバはシンハラ人です。ふたりは近所に住んでいて、おたがいの顔はよく知っていますが、民族が異なるためにちがう学校に通い、一度も話したことも遊んだこともありません。

スリランカでは、長い間シンハラ人とタミル人の争いが続いています。

「シンハラ人なんてきらいだよ。だってぼくたちを殺そうとするんだもん。」

夕食どきにシバムが言いました。それを聞いていたお母さんは、ちょっと顔をくもらせました。

一方、シルバの家では、

「またタミル人が、ぼくだんをしかけたの？」

シルバがお父さんにたずねます。

「まったくしょうがないやつらだよ。」

お父さんがこたえます。

「タミル人って、きつと悪い人たちのね。」

そんなある日、シバムの学校では上級生が劇をししてくれました。舞台は森の中 -。

少年が鳥をつかまえに森へやってきました。さまざまな色の小鳥たちは、何も知らず楽しそうに遊んでいます。そうと少年が近づいてきます。

「ようし、動くなよ。それっ。」

少年があみを投げると、小鳥たちはあみにかかりました。

「ピー、ピー。助けて。助けて。」

「どうしよう。食べられちゃうよう。」

少年は、つかまえた鳥たちを入れるふくろを取りに、いったん家にもどりました。早く何とかしないと鳥たちは少年につかまえてしまいます。でも、鳥たちはわれ先にと、ばたばたあばれるので、あみはいっそうからまっていきます。

このとき、一羽の鳥が提案しました。

「みんなで力を合わせていっしょにはばたけば、にげられるかもしれない！」

鳥たちは、つばさを大きくはばたかせます。

「そうれっ、そうれっ。」

だんだんあみが広がってういていきます。見ているシバムも心の中でいっしょにはばたきます。

「やったあ！」

鳥たちは無事にげることができました。

ほっとしているシバムに先生がたずねました。

「シバム君。この劇ではどんなことをみんなに伝えたかったのかな？」

「えーっと。うんーっと。」

「では、小鳥たちはどうしてにげられるようになったのかな？」

「みんなが力を合わせたからです。」

「そうですね。この劇を通して、争いではなく協力することの大切さをみなさんに考えてもらいたかったのです。残念ながら私たちの国でも民族の間で争いが続いているのは、みなさんも知っていますよね。」



一方、シルバの学校でも、先生が1本の木の木の棒を取りだして話を始めました。

「もしこの棒を折り曲げたらどうなるかな？」

「折れるにきまつてるじゃない。」

子どもたちは得意そうにこたえます。先生が力を入れると、棒は折れました。

先生はさらに棒を取りだして続けます。

「では4本いっしょにたばねたらどうだろう？」

「どうかなあ。」

シルバは思いました。

「じゃあ、シルバ、やってごらん。」

シルバが思いっきり力を入れても棒は折れません。

「いっしょになると強くなるね。」

先生が話します。

この後に先生はスリランカの歴史の授業を始めました。

「スリランカには、シンハラ、タミル、ムーア、ベッタなど大きく分けて4つの民族がくらししています……。」

シルバは、はっとしました。

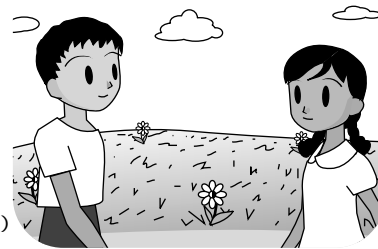
「そうか！先生は4本の棒をスリランカの民族にたとえたのね。」

さて、それから1年がたちました。



シバムは今日、下級生のために平和について考える劇をしました。劇を終えたシバムはほこらしげです。「ぼくたちの劇、下級生みんなはわかってくれたかなあ。」

はずかしいけれども、シバムは心の中で「おはよう」と言ってみました。シルバもそれが聞こえたような気がして、ちょっとにっこりすると、学校に向かってかけだしました。



やわらかな日ざしが道ばたの小さな花をやさしくつつむ次の日の朝、シバムは通学とちゆうにシルバとすれちがいました。ちょっと

("Education for Conflict Resolution in Sri Lanka" より 文・構成：日本ユニセフ協会)

長引く民族紛争

スリランカでは、政府と「タミル・イーラム解放のトラ」とよばれる分離独立を主張するグループとの間で、20年もの間抗争が続いています。テロと武力制圧のくり返しが今なお続き、この10年間で少なくとも6万人が殺され、100万人以上が家を追われました。

平和的な解決の見通しが立たない中、民族紛争が長引いているため、「争いを解決する最終手段は、結局は徹底的な暴力や武力ではないか」といった風潮も広がってきています。その影響は社会全体にまで及び、家庭内暴力、殺人、レイプ、子どもの虐待なども増加しています。

<スリランカの民族と言語>

民族

シンハラ人(74%)、タミル人(18.2%)、ムーア人(7.1%)、他(0.7%)

言語

公用語(シンハラ語、タミル語)、連結語(英語)
シンハラ人の子どもはシンハラ語を使う学校へ、タミル人の子どもはタミル語を使う学校へ通うことが多い。

紛争解決教育

次の時代を担う子どもたちが暴力によらないで争いを解決できるようにするために、スリランカでは、ユニセフの支援で「紛争解決教育(ECR)」プロジェクトが始まりました。

ECRでは、身近な事例を使って、話し合いや協力によって争いを解決していくことの大切さを教えるようにしています。それも言葉で説明するだけではなく、子どもたちが体を動かしたり、劇をしたり、歌ったりしながら楽しく学べるようにしています。子どもたちは、こうした体験的な学習を通して、お互いや自分のよいところを認め合ったり、人の話を聞くこと、固定観念や偏見に気づくこと、感情をコントロールすること、建設的な解決のために協力し合う技能などを身につけていきます。

ECRは、教育カリキュラムにも組み込まれ、校長や教員の研修の他、シンハラ語、タミル語、英語による教材開発も進められています。また、メディア・キャンペーンも開始され、親や社会にも伝えるようにしています。社会の意識改革に関わるこの教育プロジェクトの成果を測るには、まだ時間が必要ですが、子どもたちや先生の間では好評です。

Education for Conflict Resolution



© UNICEF/4822/Paul Teixeira



ともだちにえんぴつを折られたけれど、もうなかよくなったよ
—— アヌラ, 11歳



ECR研修の最初のうちは、他の民族の先生も一緒なので不安でしたが、ロールプレイをするうちにうちとけてきて、別れるときには抱き合っただけで涙が出てきたわ
—— カンティ, 教員

世界各地の紛争地域で

スリランカ、インドネシア、アフガニスタン、パレスチナ、コソボ、ブルンジ、スーダン、アンゴラ、…。現在世界各地で多発している武力紛争の多くは民族紛争です。紛争の発端には歴史的、政治的、経済的ないろいろな理由がありますが、内戦のため一般市民が犠牲になることが多く、それが憎しみを増幅させ、憎しみが暴力やテロを生む悪循環が生じています。

ユニセフは、紛争下の子どもたちのための救援活動も行っていますが、対症療法的な対応だけでは十分とは言えません。そこで、争いを解決する上で暴力を用いる方法は唯一のものでも最善のものでもないことを、子どもたちが体で理解し、平和的な解決に向けた行動をとれるようにするために、ユニセフは各地で ECR のような教育を進めています。



© UNICEF/95-0247/Howard Davies
平和の大切さを伝える人形劇を見る子どもたち。(ブルンジ)

やってみよう!

この表は、各地でよく使われているものです。グループになり、それぞれの頭文字ごとに、左側には平和を表す言葉、右側には不寛容を表す言葉を考えて発表します。日本語にアレンジして使ってみてはいかがでしょう。

Alphabet of Peace		Alphabet of Intolerance	
A	wareness	N	egotiation
B	alance	O	ppression
C	ommunity	C	onflict
D	iversity	D	epriation
E	quality	E	vasion
F	airness	F	ear
G	oodwill	G	uns
H	ope	H	ate
I	nsight	I	njustice
J	ustice	J	ealousy
K	nowledge	K	illing
L	ove	L	oss
M	ediation	M	ilitary
		N	eglect
		O	ppression
		P	rejudice
		Q	uandary
		R	acism
		S	tereotypes
		T	rauma
		U	nrest
		V	iolation
		W	ar
		X	enophobia
		Y	elling
		Z	ealotry